

紀要

■設立50周年記念号

- 鳥浜貝塚におけるニホンジカの利用…………… 佐藤 巧庸 (1)
- 土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論…………… 瀬口 眞司 (13)
- 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石…………… 宮村 誠二 (23)
- 横穴式石室の空間設計の検討
—志賀古墳群における平面プランと副葬土器…………… 堀 真人 (28)
- 木村石塚古墳出土埴輪について…………… 辻川 哲朗 (40)
- 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討
—石敷き遺構 第1遺構の構造について— …………… 田中 咲子 (57)
- 小型海獣葡萄鏡について…………… 福井 知樹 (61)
- 墨書土器にみる古代の近江 —その2—…………… 濱 修 (64)
- 比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク… 小林 裕季 (79)
- 『阿刀氏家譜系脈 御由緒二関ハル古記調査書類』
現代語訳・解題(2)…………… 阿刀 弘史 (90)
- 将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—…………… 三宅 弘 (98)
- 「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの…………… 中川 治美 (107)
- マメ類の利用についての研究ノート(2)…………… 小竹 志織 (119)
- 木製品の保存処理について —課題と実際—…………… 中村 智孝 (122)

34

将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—

三 宅 弘

1. はじめに

将棋はインドで始められ、西方に伝わってヨーロッパのチェスになり、東方に伝わって日本の将棋になったと考えられている。ただ、日本への伝わり方については諸説あり、インドから中国経由で日本へ伝わったという説（木村義徳 2001・清水康二 1998）と、インドからタイなどの東南アジア諸国を経由して日本へ伝わったという説（増川宏一 1977 大内延介 1986）が存在している。ただ、現在は東南アジア経由説でも、最終的に中国経由で日本にもたらされたという考えに収斂しているようである。

日本への将棋の伝来時期や当初の駒の形態についても、現在は清水康二氏が強く主張しているので、今後はその内容に沿ってより詳細な検討が加えられることであろう。（清水 2014）

そこで、今まで私が将棋について書いた文章で日本の将棋について取り上げた疑問の中から、改めていくつかを紹介し、私の現在までの考えの到達点を述べてみたいと思う。

2. 将棋はどこから伝わったのか

将棋の日本への伝来は、かつて中国経由説と東南アジア経由説に分かれていた。一時期は東南アジア経由説が優勢を極めていた時期があったが、（増川 1977・大内 1986）東南アジア経由説を主張する人はいずれにしても中国を経由した後に日本へ伝えられたという考えに変化してきている。（増川宏一 1996）

そこで、日本将棋と中国将棋（象棋 以下こう記す）やタイ将棋（マークルック 以下こう記す）を比較して、両説を紹介する。

象棋とマークルック共に似ている点と相違している点があるものの、駒の機能については象棋では「兵」以外ほとんど一致点が見いだせないが、マークルックでは「王」「象」「兵」が同じ動きをしている。特に「象」の駒は、他の外国将棋とは動きが異なり、唯一日本将棋の銀将に一致する。（大内 1986）

また盤についても、象棋が 9×10 で中央に河界があり、駒は移動する線上に置かれているのに対して、マークルックでは 8×8 であり、駒は移動する面に置かれている。

東南アジア経由説の主張の根拠は、この二点によるところが大きいといえる。ただ、マークルックは駒の形が立像形であるのに対して、象棋は平面形で表面に文字が書かれている。

これらの疑問に対して、清水氏は中国出土の考古資料を参照しながら明確に中国経由である根拠を述べている。

中国への伝来を考えるうえで避けて通れそうにない『玄怪録』の象棋に関する記述を「話の内容は歴史の事実を語っているのではない。」と批判していた増川説（増川 1977）を清水氏は中国経由説の立場から次のように批判する。『玄怪録』の内容に「将棋が記載されていれば、その小説が書かれた時期に将棋が存在していたことは間違いない」と述べ、また作者が牛僧孺でない場合でも「9 世紀中頃までの成立と考えるのが一般的」とした。（清水康二 2013・2014）このように、清水氏は中国に 9 世紀中頃までに将棋が伝えられたと考えている。

また、北宋の開封から出土した 12 世紀初頭頃（徽宗帝 1100～1125 在位）に出土した銅製の象棋駒（開封駒 以下そう記す）には、円柱形の表面に駒の文字が書かれ、その裏面には書かれた文字を意味する絵が描かれてある。（増川 1977）宋代には、その他にも同様の形態を持つ銅製の象棋駒が見つかっており、清水氏は「銅製の駒で裏面に文様が表現されるのは他の駒と同様で古式の象棋駒の特徴である。」と述べている。（清水康二 1998）これによって、北宋の頃には既に象棋の駒の形態が立像形から平面形に変わっていたと推測される。

この資料は、表面に文字を記し裏面にその文字の表す絵を記しているということは、象棋の駒が当初伝えられた立像形から平面形になっていく過程の時期であることを示している。

では、象棋駒は北宋より以前のいつ頃に平面形になったのであろうか。象棋駒が平面化した後に表面に文字が書かれたのであろうから、北宋をそれほど遡ることはないと考えられる。仮に中国から日本へ将棋が伝えられたと考えると、平面化及び文字化の時期が、少なくとも興福寺出土駒の 11 世紀中頃より以前でなければならない。

将棋の駒が平面形であること、駒に文字が書かれてあることなどから、9 世紀中頃までに中国に伝わった将棋が、盤上のマス目を移動する動きのままで、駒の平面化と文字化を経て定着した後に、日本へ伝えられたものと考えれば納得できる。ただし、象棋の駒の平面化の時期が問題となってくる。

清水氏は、中国から日本へは文字駒が伝来したのであり、立像形の駒の伝来を否定している。また、『玄怪録』の内容から木村義徳氏が立像形で二文字の駒を想定していることに対して、平面形で一文字駒の「古式象棋」の存在を提示され、それらが日本へ伝えられたと述べている⁽¹⁾。その時期も、興福寺駒の 11 世紀中頃から遡っても 100 年前後の 10 世紀後半から 11 世紀前半までには日本への伝来があ

ったものとしている。（清水 1998・2013・2014）

ここで、日本への将棋の伝来時期を私なりに大胆に想像してみる。

将棋が中国から伝えられたと仮定すると、中国での象棋の平面化及び文字化の時期が問題になってくる。将棋がその国に伝えられてから、独自の変化をするまでにどのくらいの期間が必要なのであろうか。

中国の確実な出土例から見てみると、1100 年から 1125 年の頃と考えられる河南省開封出土の銅製象棋駒が平面形で表面に文字、裏面に絵が描かれている。また、1 点であるが、浙江省寧波市の天封塔地宮出土駒は、12 世紀中頃（1144～1145 年）の銅製の駒で表に文字、裏に絵が描かれている。これは、立像形で伝わった将棋が現行の象棋に変わる過渡期の駒であるといえる。また、福建省泉州市泉州灣宋代海船出土の木製象棋駒は表面の文字のみで、駒が紅方と黒方に色分けされ現行象棋と同じ形態をしている。この年代が 13 世紀終わりころであるから、天封塔出土の駒と宋代海船出土駒の間隔が 150 年程度と推測できる。この間に、銅製で表に二文字裏に絵の駒から木製で表のみに一文字で色分けされている現行象棋の駒に変化したと考えられる。ここからどのくらい遡れば伝来当初の立像形の駒に行き当たるのであろうか。

清水氏の述べる『玄怪録』の「古式象棋」が 9 世紀中頃であるので、このころには平面形で一文字の象棋駒が存在していた可能性がある。

中国の象棋は、12 世紀中頃から 13 世紀終わりのある時期に現行象棋に変化しているので、その時期を両者の間を取って 13 世紀初頭頃と推測してみる。9 世紀中頃には駒の平面化が行われていたと推測できるので、同時に文字化も行われたと考えられる②。

9 世紀中頃から 13 世紀初頭頃までは約 350 年である。この期間を経て象棋は表面文字裏面絵の駒から表面文字の色分け駒に変化した。

「古式象棋」の駒は馬や車が日本将棋の桂馬や香車と同じような力に弱い駒であった可能性を示唆している。（清水 1998）清水氏の言う「古式象棋」がこの時期であったとすれば、まさにこの 350 年の間に日本へ伝えられたと考えられる。

そうであるならば、日本への将棋の伝来は 10 世紀中頃以降 11 世紀中頃以前の期間に、1 字の「文字駒」・駒のマス目移動などの象棋が伝えられ、それから 100 年以内に興福寺駒のような形態に変化したと考えられる。

次に、参考として日本将棋の変化について考えてみる。日本将棋の現在最古の駒は奈良県の興福寺旧境内出土駒（興福寺駒 以下こう記す）である。（清水康二 1994）この時の日本将棋の駒は、現在の駒と比べて飛車と角行のな

いもの（小将棋の場合）である。この将棋（平安小将棋）とともに当初から存在していたと考えられる駒数 13 種 68 枚の平安大将棋の駒がある。因みに、平安大将棋の駒は 12 世紀末頃の「飛龍」が見つかっている。（表 1 参照）（木簡学会 2003）

平安小将棋・平安大将棋（両方をまとめるときは平安将棋と記す）は 13 世紀初頭頃に編纂された『二中歴』に記載されている。（国書刊行会編 1903）『二中歴』は『掌中歴』と『懐中歴』が一つに纏められたもので、将棋の記載のある『掌中歴』は三善為康（1049～1139）が編纂したものと言われ、平安時代後期には存在していたと考えられる。平安大将棋は、平安小将棋とほぼ同じ時期に存在していたことは間違いないので、興福寺駒の出土時期である 11 世紀中頃には存在していたと考えてよい。

平安大将棋が変化したと考えられている大将棋（鎌倉大将棋と呼ぶ人もいる）の成立時期は今のところ明確ではないが、遺跡からの出土では、石川県堅田 B 遺跡から 13 世紀中頃～後葉の「竜馬」（角行の裏側）が、（木簡学会 2005）徳島県川西遺跡から 13 世紀後半頃の「本横（奔王であろう）」の駒が見つかっている。（表 1 参照）（木簡学会 2011）

これらから、遅く見ても 13 世紀後半頃には大将棋が存在していたと考えられる。この 13 世紀後半から遡って平安大将棋が誕生したと考えられる 11 世紀中頃までは約 200 年の開きがある。

平安時代の将棋は『和名類聚鈔』（『和名鈔』以下こう記す）に記載されていなかったことから、『和名鈔』の作成された 931～937 年すなわち 10 世紀前半頃にはまだ知られていなかったものと考えられる。

そうすると、将棋の伝来は古くても 10 世紀前半以降と想定され、興福寺駒よりさらに最大で 100 年ほど遡ると考えられる。平安将棋は伝来から約 300 年で平安大将棋が大将棋に変化したという推測が成り立つ。

ただし、これはあくまでも推測の上に推測を重ねたものである。平安将棋には、『二中歴』に記述されていない「酔象」駒を含んだ将棋の問題が残されている。

3. 将棋には、何故「玉将」と「王将」が存在するのか？

(1) 出土駒から（表 1 参照）

将棋が日本へ伝えられたとき、最初の駒は「王将」ではなく「玉将」であったといわれている。（増川 1977）しかし、現在の日本の将棋は「玉将」と「王将」の 2 種類の駒が存在している。では、日本将棋の玉将は、いつ頃二つに分かれたのか？

① 最古の出土駒である天喜 6 年（1058 年）の奈良県興福寺旧境内遺跡の出土駒（興福寺駒、出土駒は以下このように記す）は、3 枚とも玉将である。（図 2 参照）（清水康二・小栗明彦 1993）それに続く玉将駒は、福岡県博多遺跡群から 13 世紀後半頃のもの 1 枚出土している。

表 1 鎌倉時代以前の出土駒

遺 跡 名	所在地	時 期	駒 の 種 類												備 考	文 献
			王将	玉将	飛車	角行	金将	銀将	桂馬	香車	歩兵	不明	その他	合計		
興福寺旧境内	奈良県	天喜六(1058)年		3			4	1	1		5	1		15		木簡学会1994
深田(日高)遺跡	兵庫県	1094~95年(寛治7年=1093の木簡と共伴)									1			1		小泉信吾1987a
酒田城輪	山形県	平安後期(11c末~12c)									1			1		小泉信吾1987b
鳥羽離宮跡77次	京都府	平安後期									1	1		2		吉崎伸ほか1983
史跡奈良公園・興福寺跡	奈良県	承徳二(1098)年							1		5		1	7	酔象駒	木簡学会2017
史跡奈良公園・興福寺跡	奈良県	11c後半~12c前半									1			1		木簡学会2017
石名田木舟遺跡2	富山県	11c~12c	1				1							2		木簡学会1995b
中尊寺境内金剛院跡	岩手県	12c前葉					1	3	2	1	5	2		14		木簡学会1995a
史跡奈良公園・興福寺跡	奈良県	12c中頃														木簡学会2017
柳之御所遺跡28次	岩手県	12c後半										1		1		木簡学会2013
柳之御所遺跡28次	岩手県	12c後半									1			1		木簡学会1991
柳之御所遺跡78次	岩手県	12c後半									1			1		木簡学会2018
塩津港遺跡	滋賀県	12c第2四半期~末	1				1					2		4		滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2019・同2021(3月刊行予定)
志羅山遺跡	岩手県	平安末頃(12c)											1	1	飛龍駒	木簡学会2003
上清滝遺跡	大阪府	寿永三(1184)年	1								1	1		3		木簡学会1990・四条畷市史編さん委員会2016
鳥羽離宮跡135次	京都府	1203年	1											1		木簡学会1991
玉津田中遺跡	兵庫県	13c初							1					1		兵庫県教育委員会1995
大倉幕府周辺(二階堂荏柄58番地4外地点)	神奈川県	12c末~13c前										1		1		山本祥隆2019
安養寺跡	三重県	平安末~鎌倉初(12c第3四半~13c前葉)										2		2		木簡学会1993・二見町教育委員会2004
今小路周辺遺跡群	神奈川県	13c前半					1							1		小泉信吾1987b
安養寺跡	三重県	13c前葉以降										2		2		木簡学会1993・二見町教育委員会2004
北条時房・顕時邸跡	神奈川県	13c前~中						1						1		木簡学会2019
滋賀里遺跡	滋賀県	13c中頃	1											1		三宅弘1988
堅田B遺跡	石川県	13c中頃~後葉				1								1	片面「龍馬」のみ記載	木簡学会2005
博多遺跡群	福岡県	13c後半		1						1				2		木簡学会1997・福岡市教育委員会1991
若宮大路周辺遺跡群	神奈川県	13c後半							1					1		木簡学会2001
平安京跡(左京八条三坊十四町)	京都府	鎌倉後期									1	1		2	中兵駒	木簡学会1995c
川西遺跡	徳島県	13c					1					1	1	3	本横駒(奔王)	木簡学会2011
中島田遺跡	徳島県	13c後半~14c前半									1			1		木簡学会1993
千葉地遺跡	神奈川県	13c末(13中~14末以降)					1					1		2		小泉信吾1987b
鳥羽離宮跡59次	京都府	鎌倉頃					1							1		京都府教育委員会1980
大桶遺跡	山形県	鎌倉頃							1					1		木簡学会1988
剣野沢遺跡	新潟県	鎌倉頃					1							1		木簡学会2010
新安沖海底船	大韓民国	1323頃	1				2		2	3	3			11		小泉信吾1987b
武蔵大路周辺	神奈川県	14前~中								1				1		木簡学会2019

（木簡学会 1997a・福岡市教育委員会 1991）

- ② 最古の王将駒は富山県石名田木舟遺跡（富山県福岡町調査）の 11～12 世紀のものである。（福岡町教育委員会 1995・木簡学会 1995）その他にも滋賀県塩津港遺跡例が治承 5 年（1181 年）（滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2021）、大阪府上清滝遺跡例は寿永 3 年（1184 年）（木簡学会 1990a『木簡研究』第 12 号・四条畷市史編さん委員会 2016）、京都府鳥羽離宮跡例が建仁 3 年（1203 年）（木簡学会 1991）と、いずれも記年名の木簡とともに出土した王将駒が各 1 枚存在する。

石名田木舟遺跡の時期幅がかなりあるので明確なことは言えないが、古い時期（11 世紀代）で想定すると興福寺駒とほぼ同じ頃と考えられ、新しい時期（12 世紀代）で想定すると興福寺駒より 100 年前後新しいものとなる。その他の駒が興福寺駒より約 150 年新しいこともあり、石名田駒の詳しい年代が知りたいところであるが、この駒は「王将」と書かれてあるのではなく、「王」一文字が書かれている。

王将もしくは玉将の裏に文字が書かれていることは、少しであるが見つかった。

最古の興福寺駒の玉将も 3 枚のうち 1 枚は「玉将」、もう 1 枚は「(成得)」と読める文字(3)が裏に書かれている。また、滋賀県の滋賀里遺跡出土の王将駒には、裏に「王」1 文字が書かれている。（三宅 1988）この駒は以前 13 世紀頃と紹介したのであるが、駒の形態などからもう少し降る可能性があると考えている。（三宅 1993）そこから考えると、王ひと文字の駒は王将の略なのか玉将の裏なのかの判別が付きにくい。

その他、福井県の一乗谷朝倉氏遺跡（1567 年下限）では「王将」と読める 2 枚の駒の裏側にそれぞれ「王将」「玉□」（将の偏部分のみ掘りかけている。旁部分は書かれていない）と読める文字が認められる。（福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 1979）

このように、これまでの出土例からはわずかであるが王将の裏には王もしくは王将・玉将、玉将の裏には玉将と書かれていることがある。それから考えると、王ひと文字の場合は王将の裏に書かれてあったと推測できるかもしれない。

(2) 王将駒誕生の推測

王将駒は現在のところ、最古の玉将駒から約 100～150 年後に出現している。では、当初玉将であった駒が玉将と王将の種類に分かれた理由は何であろうか、ということを考えてみた。

①当初玉将と書かれてあったのが、玉の字の点「丶」が消えた。

②何らかの理由で、玉将と区別するために「王将」と書いた(4)。

③玉将では役割がわかりにくいので、玉を王の字に変えた。→ほかの駒の文字はどうか？（金銀桂香などは、理解されるのか？）

- ① 可能性としてはないとは言えないが、同じ面のほかの部分を残したままそこだけ消えるというのは、少し考え難い。赤外線写真の撮られてある駒が数例みられるが、いずれも肉眼での点の見落としは確認されていない。
- ② 玉将駒を区別する理由としては、駒の進む方向が明確であるということを別にすれば、敵味方を区別することが挙げられる。金将以下の駒はとられる可能性があるが、玉将は最後まで盤上に残るものである。従って、玉将への敬意も込めて分けたのではないか。
- ③ 役割による分類の仕方については、確かに玉より王のほうが戦争ゲームである将棋の頂点に立つ駒の名称としては似つかわしいように思う。しかし、なぜ片方だけが替えられたのか、金将以下の駒についてもなぜそれが適用さなかったのかという疑問が残る。

上記の考えをまとめると、敵味方の区別をつけるために分けられた可能性が出てくる。遺跡からの出土例を確認すると、玉将や王将駒が 2 枚以上出土した遺跡の例では、中世の朝倉氏遺跡例が唯一両方見られるのみである。

4. 持ち駒の再使用はいつからか？

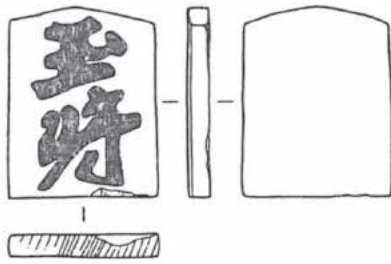
(1) 飛車・角行登場の前か後か

持ち駒の再使用については、小将棋が今の形になってからの変化および、誰もが覚えやすい駒数やルールになってからの変化が、可能性としては高いように思われる。

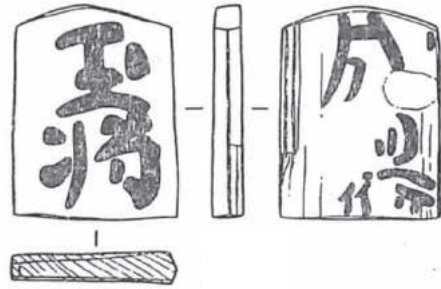
持ち駒再使用の条件を以下に記してみる。

- ① 敵味方が同じ（形・色等）駒である。
- ② 駒の向きが明確にわかる。（敵陣に打ち込んでも紛らわしくない）
- ③ 引き分けの回避。駒数の少ない将棋では、駒の取り捨てるルールでは決着がつかないことが多くなると考えられる。
- ④ ゲームの複雑化を促す。（大きく動く駒が登場した後では、簡単に勝負がついてしまうことを避けるため）

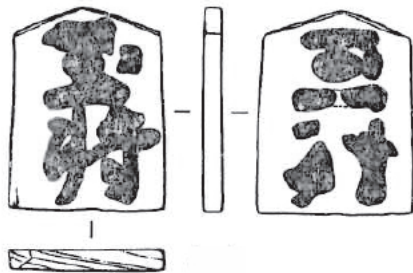
駒の裏側に書かれている「金」の文字がそれぞれの駒で異なることが、相手の駒をとって持ち駒にするときに、より価値の高い駒をとるための判断材料になるという考え（木村義徳 2001）は、確かに一理あるように思えるが、興福寺駒を見ると銀将から歩兵駒の裏面の文字は、駒の種類ごとに統一されているわけではなく、楷書に近い「金」や、「と」および「ケ」（＝「と」を崩した文字と考えられる）と読める文字がそれぞれに書かれているのがわかる。（図



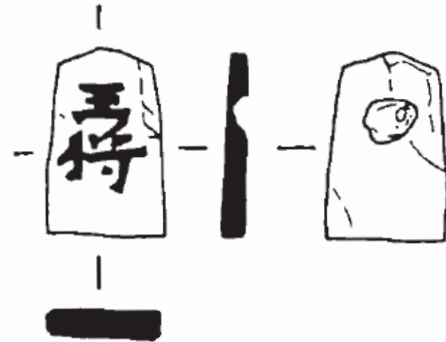
1. 興福寺旧境内 玉将（裏は空白）



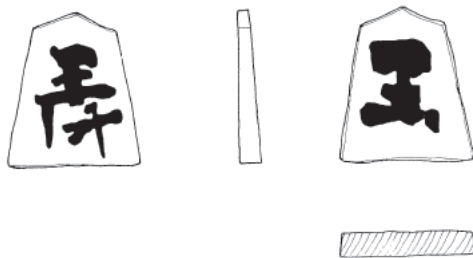
2. 興福寺旧境内 玉将（裏は「成得カ」）



3. 興福寺旧境内 玉将（裏も玉将）



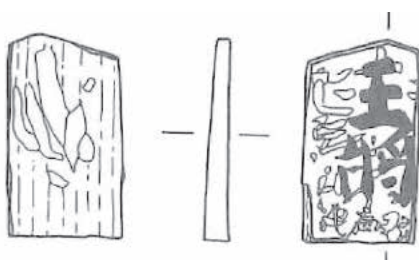
4. 鳥羽離宮跡 135 次 王将（裏は空白）



5. 滋賀里遺跡 王将（裏は王）



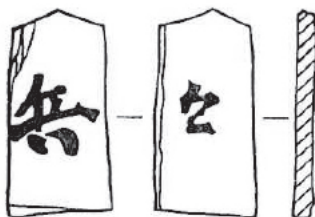
6. 博多遺跡群 玉将（裏は空白）



7. 石名田木舟遺跡 王将（裏は空白）



8. 日高遺跡 歩兵（裏は不明）



9. 酒田城輪遺跡 兵（裏は々）

出土駒実測図の文献

1. ～ 3. 奈良県立橿原考古学研究所 1994
4. 木簡学会 1991
5. 三宅弘 1988
6. 福岡市教育委員会 1991
7. 財団法人富山県文化振興財団 2002
8. 小泉信吾 1987a
9. 小泉信吾 1987b

図1 王将・玉将駒の裏側の比較など

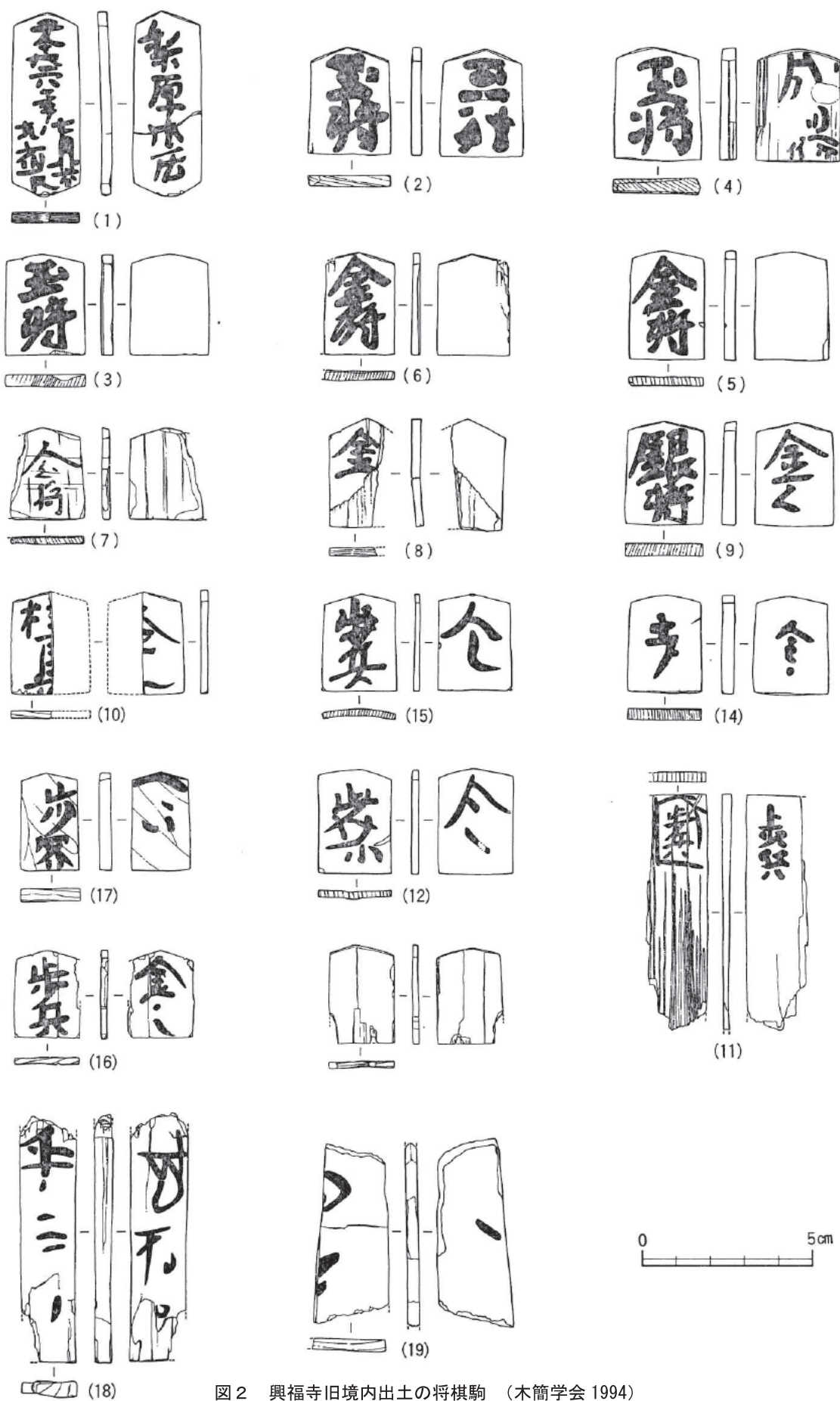


図2 興福寺旧境内出土の将棋駒 (木簡学会 1994)



図3 中尊寺境内金剛院出土の将棋駒 (木簡学会 1995a)

2 参照)

中尊寺駒（木簡学会 1995a）でも銀将・香車・歩兵の裏側が「金」の楷書であったり、はっきりと「金将」と書かれてあったりする。また、桂馬や歩兵の裏側も「金」であったり「ケ」や「と」であったり様々である。（図 3 参照）

従って、少なくとも 11 世紀中頃から 12 世紀前葉の段階では各駒の裏面の文字が統一されているというようなことは考えられない。

ではいつから始まったのか

ゲームとしての将棋の形態が今の小将棋（＝現在の将棋）に近い様態を呈して以降のことだと考えられる。

駒の取り捨てでも、駒自体の動きが小さい（弱い）場合では、一気に勝負がつくようなことは考えにくい。また、当初から酔象が小将棋に加わっているならば、玉将を取られても酔象が成ってさえいればゲームは続行できるのである（5）。

従って、持ち駒の再使用は平安時代の小将棋に飛車と角行が加わって以降のことではないか。飛車と角行の大きい動きで決着が早くにつくことが多くなったので、相手からとった駒を自分の持ち駒に使用したのが最初ではないか。

それは、角行が出土した最古の遺跡、石川県堅田 B 遺跡から 13 世紀中頃～後葉の「竜馬」（角行の裏と考えればもっとも古い）（木簡学会 2005）が初めてではないだろうか。すなわち、鎌倉時代後期に持ち駒の再使用が始まったと推測される。（三宅 2018）

5. 終わりに

以上、3 つの疑問に私なりの解釈を与えてみた。書き終わって見返すと納得のいく説明ができていないものもあり、いささか恥じ入る次第である。しかし、これが現状での私の到達点である。今後、この考えの延長線上に立って新たな思考へと発展させることができるかどうかは、私の努力次第であると考えます。

また、この拙文が他の研究者の考えの参考になることがあるすれば、これほど喜ばしいことはない。

註

- (1) 清水氏の言う「古式象棋」はそのほかに、駒の文字は 1 文字であること、「砲」の駒がないこと、盤面中央の河界が存在しないことなどが挙げられている。また、駒のマス目移動については、言及されていない。
- (2) 象棋の駒が立像形から平面形に変化したときに、駒の表面に文字か絵などがなければ駒の種類が特定できないことになる。駒の大きさや形による区別は不可能ではないが、宋代の出土象棋駒はみな円形を呈し、大きさもほとんど変わらない。
- (3) 参考にした報告書（清水 1993）には「成得」と読めるとは書かれていない。筆者の独自の見解であることを申し添えておく。

(4) 象棋では 13 世紀終わり頃の泉州湾宋代海船出土駒に「将」と「帥」の両者が見られる。

(5) 日本最古の将棋駒である興福寺駒では出土した「酔象」の裏面には文字が確認されていない。平安将棋では、「酔象」は成れない駒であったのかもしれない。

また、『二中歴』に酔象駒の記述がないのはどういうことだろうか。この時期にもっと多くの将棋が存在していたのであろうか。

文献

- 大内延介 (1986) 『将棋の来た道』タイ編 1・2 めこん
- 木村義徳 (2001) 『持駒使用の謎』日本将棋連盟
- 京都府教育委員会 (1980) 鳥羽離宮跡調査概要（鳥羽離宮跡 第 59 次）
- 京都府立山城郷土資料館編 (2018) 平成 30 年度特別展『文字のささやき～京都府出土の文字資料～』展示図録 41 京都府立山城郷土資料館・京都府立山城郷土資料館友の会（上久世城ノ内遺跡）
- 小泉信吾 (1987a) 「出土駒から見た将棋の発生」（『京都府埋蔵文化財情報』第 23 号 京都府埋蔵文化財調査研究センター）
- 小泉信吾 (1987b) 「駒の出土例とその意義」（『京都府埋蔵文化財論集』第 1 集—創立 5 周年記念誌—財団法人京都市埋蔵文化財研究所（酒田城輪遺跡・川西遺跡）
- 国書刊行会 編 (1903) 『史籍集覧』（二中歴）
- 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 (2019) 『塩津港遺跡 1』（大川総合流域防災時事業に伴う発掘調査報告書 1）
- 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 (2021) 『塩津港遺跡 2』（大川総合流域防災時事業に伴う発掘調査報告書 2）2021 年 3 月に刊行予定
- 清水康二ほか (1993) 「興福寺旧境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1992 年度第 2 分冊』奈良県立橿原考古学研究所
- 清水康二 (1994) 「将棋伝来についての一試論」『遊戯史研究』6 号 遊戯史研究会
- 清水康二 (1998) 「古式象棋と将棋の伝来」『月刊考古学ジャーナル』3 月号 No.428 ニューサイエンス社
- 清水康二 (2013) 「将棋伝来再考」橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』第 36 冊
- 清水康二 (2014) 「庶民の遊戯である将棋考」橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』第 37 冊
- 清水康二・小栗明彦 (1993) 「興福寺旧境内」『大和を掘る』1 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 日本経済新聞ほか (2013) 10 月 24 日付
- 兵庫県教育委員会 (1995) 『神戸市西区 玉津田中遺跡—第 4 分冊—（辻ヶ内・居住地区の調査）』
- 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 (1979) 『特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書 I』（—乗谷朝倉氏遺跡）
- 福岡町教育委員会 (1995) 『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』・木簡学会 (1995) 『木簡研究』第 17 号（石名田木舟遺跡 1 次調査）

増川宏一（1977）『将棋Ⅰ』ものと人間の文化史 23 法政大学出版局

増川宏一（1985）『将棋Ⅱ』ものと人間の文化史 23—Ⅱ 法政大学出版局

増川宏一（1996）『将棋の起源』平凡社

三宅弘（1988）「155. 滋賀里遺跡出土の将棋駒について」『滋賀文化財だより』No.127 財団法人滋賀県文化財保護協会

三宅弘（1993）「将棋史研究ノート 3」『紀要』第 6 号 財団法人滋賀県文化財保護協会（滋賀里遺跡）

三宅弘（2018）「将棋史研究ノート 9 飛車と角行の登場」『紀要』第 31 号 財団法人滋賀県文化財保護協会

木簡学会（1987）『木簡研究』第 9 号（但馬国府推定地：日高・深田遺跡）

木簡学会（1988）『木簡研究』第 10 号（大楯遺跡）

木簡学会（1990）『木簡研究』第 12 号・四条畷市史編さん委員会（2016）『四条畷市史』第 5 巻（考古編）（上清滝遺跡）

木簡学会（1991）『木簡研究』第 13 号（鳥羽離宮跡 第 135 次・柳之御所遺跡 28 次）

木簡学会（1993a）『木簡研究』第 15 号・二見町教育委員会（2004）「安養寺跡・豆石山中世墓群・豆石山経塚群・五峰山 2 号墳」（二見町文化財調査報告 2）2004（安養寺跡）

木簡学会（1993b）『木簡研究』第 15 号（中島田遺跡）

木簡学会（1994）『木簡研究』第 16 号（興福寺旧境内跡）・奈良県立橿原考古学研究所（1994）『興福寺旧境内発掘調査概報』

木簡学会（1995a）『木簡研究』第 17 号・平泉町教育委員会（1995）『特別史跡中尊寺境内金剛院発掘調査報告書』（中尊寺境内金剛院跡）

木簡学会（1995b）『木簡研究』第 17 号・財団法人富山県文化振興財団（1995）『埋蔵文化財調査年報』6 平成 6 年度・財団法人富山県文化振興財団（2002）『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』（石名田木舟遺跡）

木簡学会（1995c）『木簡研究』第 17 号（平安京跡：左京八条三坊十四町）

木簡学会（1997）『木簡研究』第 19 号・福岡市教育委員会（1991）『「博多 24」—博多遺跡群第 61 次発掘調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 252 集（博多遺跡群）

木簡学会（2001）『木簡研究』第 23 号（若宮大路周辺遺跡群）

木簡学会（2003）『木簡研究』第 25 号（志羅山遺跡）

木簡学会（2005）『木簡研究』第 27 号（堅田 B 遺跡）

木簡学会（2010）『木簡研究』第 32 号（剣野沢遺跡）

木簡学会（2011）『木簡研究』第 33 号（川西遺跡）

木簡学会（2013）『木簡研究』第 35 号（柳之御所遺跡 第 28 次）

木簡学会（2017）『木簡研究』第 39 号（興福寺跡）

木簡学会（2018）『木簡研究』第 40 号（柳之御所遺跡 第 78 次）

山本祥隆（2019）『第 41 回木簡学会研究集会報告 2019 年全国出土の木簡』木簡学会（大倉幕府周辺遺跡・北条時房・顕時邸跡・武蔵大路周辺遺跡）

吉崎伸・鈴木廣司（1983）「IV 鳥羽離宮跡」29 第 77 次調査『昭

和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所（鳥羽離宮跡第 77 次）

（みやけ ひろし：保存活用課 主任技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.34 2021.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages